

## 弟子の祈り パート1 (マタイ6:1-13)

6:1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。 6:2 だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。 6:3 あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。 6:4 あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。 6:5 また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。 6:6 あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。 6:7 また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。 6:8 だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたが願うする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。 6:9 だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。 6:10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。 6:11 私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。 6:12 私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。 6:13 私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』  
〔国と力と栄えは、とこしえにあなたのもものだからです。アーメン。〕

## 導入

祈りという、ずいぶん漠然としたテーマのようですが、とても重要なテーマです。クリスチャン生活で、もっともよく取り上げられる話題である一方、あまり実践されていないのが実情です。というわけで、今回このテーマについて、もっと多くを知るという観点ではなく、個人のデポジションにおいても、OIC という教会全体でも、実践することを視野に学んでいきたいと思えます。

祈りのある生活は、神に頼っている証です。これは、ひとりひとりについてだけでなく、教会全体の信仰について言えることです。祈りの中で初代教会は生まれました。使徒の働きの随所には、小さな教会が驚くような祈りの答えをいただいた例が記されています。

中でもよく知られているのは、使徒12:5-17でしょう。

12:5 こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。 12:6 ところでヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれてふたりの兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。 12:7 すると突然、主の御使いが現れ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたいて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた。 12:8 そして御使いが、「帯を締めて、くつをはきなさい」と言うので、彼はそれとおりにした。すると、「上着を着て、私について来なさい」と言った。 12:9 そこで、外に出て、御使いについて行った。彼には御使いのしている事が現実の事だとはわからず、幻を見ているのだと思われた。 12:10 彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりでに開いた。そこで、彼らは外に出て、ある通りを進んで行くと、御使いは、たちまち彼を離れた。 12:11 そのとき、ペテロは我に返って言った。「今、確かにわかった。主は御使いを遣わして、ヘロデの手から、また、ユダヤ人たちが待ち構えていたすべての災いから、私を救い出してくださったのだ。」 12:12 こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。 12:13 彼が入口の戸をたたくと、ロダという女中が応対に出て来た。 12:14 ところが、ペテロの声だとわかると、喜びのあまり門をあけもしないで、奥へ駆け込み、ペテロが門の外に立つ

ていることをみなに知らせた。12:15 彼らは、「あなたは気が狂っているのだ」と言ったが、彼女はほんとうだと言い張った。そこで彼らは、「それは彼の御使いだ」と言っていた。12:16 しかし、ペテロはたたき続けていた。彼らが門をあけると、そこにペテロがいたので、非常に驚いた。12:17 しかし彼は、手ぶりで彼らを静かにさせ、主がどのようにして牢から救い出してくださったかを、彼らに話して聞かせた。それから、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」と言って、ほかの所へ出て行った。

祈りは信徒に与えられた唯一のコミュニケーション手段なので、私たちができるだけこのテーマについて理解することが不可欠です。

イエスはヨハネ15：5で「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」とおっしゃいました。ですから、イエスが祈りについて教えてくださる内容は、とても貴重です。

聖書だけが、祈りについて学べる場所です。

まず弟子の祈りを学び、次に教会全体の祈りを使徒の働きから学びます。最終的には、新約聖書の書簡からパウロの祈りも学びます。

この学びを終えるころには、私たちが祈りについて十分な理解を得ていることを望みます。また、みことばの教えに沿って祈りの生活を改善しようという意欲を私たちが持てることを願います。

祈りの生活や教会生活は、マンネリ化しやすいものです。そんなマンネリを解消し、個人の祈りの生活や教会の祈りの生活において私たちが前進するのを助けたいと、神は望んでくださいます。

マタイの福音書でイエスが祈りについて何と教えておられるか学ぶ前に、ルカ11：1を読みましよう。

11:1 さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

ルカ11：1には、イエスが祈っているとある弟子が祈り方を教えてほしいとイエスにお願いしたとあります。イエスが神に語りかける姿を見た若い弟子は、何かを感じて、よりよく祈りたいと思ったのでしょう。彼はイエスの祈りを聞き、もっと祈りについて知り、弟子としてさらに備えられることを望みました。

この個所で、イエスはこの弟子に、模範を示されました。家の設計図を渡されたようなものです。完成形はわかりますが、それを実際に建てるには自分が動かなければなりません。棚からぼた餅というわけにはいきません。たいへんな重労働です。同様に祈りも、良い変化があらわれるためには努力が必要です。

今から学ぶ祈りは、イエスが教えられた祈りなので、一般的には主の祈りと呼ばれていますが、これは弟子たちのために祈りです。ですので、私はこれを弟子の祈りと呼ぶことにします。

では、マタイの福音書に戻って、弟子の祈りをひも解いていきましょう。

## 1. 天にいます私たちの父よ。..... (9節)

祈り始める前に、私たちの「天にいます父」「天の父」として神を知っていなければなりません。超自然の恐れ多い存在に近づく権利はどこから来るのかを知る必要があります。このお方は、無からすべてを生みだすことのできる方です。6日でこの世を創造したお方です。地のちりから男を造り、命を吹き込んだお方です。男から女を造られたお方です。広大な宇宙で起こるすべてを支配しておられるおかたです。

私たちはどういう理由でこのような恐れ多い神に近づくことができるのでしょうか。

神は完全に聖なるお方であり、私たちは完全に罪深い者です。どうすれば、神と語り合えることができるでしょう。

神の御前に出て話すことができる唯一の方法は、私たちが養子のように子とされることです。神の家族の一員として迎え入れていただくまで、神は私たちの「父」ではなく、「裁き主」です。罪が私たちを神から引き離すので、神は私たちの祈りをお聞きになりません。

イザヤ59：1-2にはこうあります。

59:1 見よ。【主】の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。 59:2 あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

聖書は、神の子とされて神の家族の一員になる前は、私たちは敵であったと語ります。  
(ローマ5：10)

イエスが十字架上で死に、私たちの罪の罰についての神の律法が満たされました。イエスの御業によって、私たちが神の家族に戻る条件が満たされたのです。

イエスを信じて、自分の罪のためにイエスが罰を受けてくださったと信じるなら、神は私たちを神の家族として迎え入れてくださり、神が私たちの天の父になられます。

イエスはヨハネ14：6で、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」とおっしゃいました。

テモテ第一2：5には、「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。」とあります。

神が偉大な恐れ多いお方であることに変わりはありませんが、私たちは天の父である神の御前に行くことができます。そうできるのは、イエスが十字架上で私たちの罪の罰を負ってくださったからです。

天の父なる神に近づくとき、それが大きな特権であることを認識しなければなりません。というのも、これを実現するために、神の子イエス・キリストが十字架上で尊い血を流してくださったからです。

神の御許に行くのに支払いはありませんが、この権利を得るための代償は大きいものでした。その代償とは、神のひとり子イエス・キリストの血が流されることでした。

人は生まれつき、神の敵です。けれどもイエスをとおして、神は私たちを養子、養女として迎えてくださいます。(ガラテヤ4：4-7)

神を父と呼ぶことで、すべてはイエスのおかげであることが思い出されます。キリストにある救いを思い起こさずに祈ることはできません。

神にささげる祈りはすべて「恵み」の祈りです。私たちは天の父の息子や娘になる資格のない者ですが、神はイエスに免じて、愛と恵みをもって私たちを受け入れてくださいます。

「天にいます私たちの父よ。」という表現には、ふたつの側面があります。

ひとつは「親密さ」です。イエスの御業によって、神の家族として迎えられたことを示します。

ふたつめは「畏れ」です。神は天の父です。

皆さんは、「父親」という言葉からどんなことを連想するでしょう。血のつながった父親に対してあまり良いイメージを持っていない人もいるでしょう。しかし、聖書は、私たちの天の父がふたつのことばを象徴すると教えます。「世話」と「権威」です。

神が私たちの天の父になると、神はあなたの面倒をみてくださいます。何を食べようか、何を着ようかと悩む必要はもうありません。

マタイ6：25-34を読んでみましょう。

6:25 だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。6:26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。6:27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。6:28 なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。6:29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。6:30 きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくして下さらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。6:31 そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。6:32 こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。6:34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

天の父が私たちの必要を世話してくださると信じるよう進める個所が、新約聖書には他にもたくさんあります。

私たちが「天にいます私たちの父よ。」と祈るとき、必要を満たしてくださる偉大なお方に祈っているだけではありません。このお方は、愛情をもって私たちを支配なさるお方です。

人間の父親には、我が子を導き、正し、躰ける役割があります。天の父も同じ役割があることを知っておきましょう。

神は、箴言に登場する我が子にむちを控える愛のない父親のようではありません。（箴言13：24）

神は私たちを子として扱われる愛情深い父です。ヘブル12：5-11を読みましょう。

12:5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」12:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。12:8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。12:9 さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないのでしょうか。12:10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自

分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

「天にいます私たちの父よ。」と祈るとき、私たちは神によって必要を満たしていただくと同時に、みことばの躰を受け入れるのです。

聖書を読む習慣をつけ、みことばをとおして神に躰けていただくことを受け入れるまでは、ちゃんと祈ることはできません。

祈りは、私たちが神に一方的に話すことではありません。神は聖書をとおして私たちに答えられます。

神は、必要を満たすと約束してくださいますが、私たちが神のみことばに従うことも要求されます。

「天にいます私たちの父よ。」と祈るとき、神が私たちにとって何が最善かをご存じであると覚えておく必要があります。私たちは「天の父」を信用しなければなりません。

神のみことばに従うことで、私たちは心に平安を得ます。また、もっと祈りたいと思うようになります。父子関係に問題がないからです。

コリント第一2:9はこう語ります。

まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」

神は私たちが知り、愛し、世話をしてくださいます。神にすべてをゆだねる人には、最善を与えてくださいます。

祈りの中で神の御前に出るとき、私たちは神をたたえ、感謝することができます。イエスによって成してくださったすばらしい御業を感謝し、偉大な宇宙の創造主をたたえるのです。

## 2. 「御名があがめられますように。」 .....

弟子の祈りにおける最初の願いは、どのようなお方に祈りをささげているのかという認識から自然と生まれるものです。「御名があがめられますように。」とは、あなたの名前が聖なるものと認識され、そのように扱われ、畏れられますように、という意味です。

イエスがここでおっしゃったのは、祈るときにまずすべきなのは、すべてにおいて神の栄光を求めることだということです。私たちの望みが第一ではありません。

神の栄光をまず求めるという原則は、聖書の至るところに見られます。

アイとの戦いに敗れたとき、ヨシュアの頭にあったのが神の栄光でした。

ヨシュア7:6-9

7:6 ヨシュアは着物を裂き、イスラエルの長老たちといっしょに、【主】の箱の前で、夕方まで地にひれ伏し、自分たちの頭にちりをかぶった。7:7 ヨシュアは言った。「ああ、神、主よ。あなたはどのようにしてこの民にヨルダン川をあくまでも渡らせて、私たちをエモリ人の手に渡して、滅ぼそうとされるのですか。私たちは心を決めてヨルダン川の向こう側に居残ればよかったです。7:8 ああ、主よ。イスラエルが敵の前に背を見せた今となっては、何を申し上げることができましょう。7:9 カナン人や、この地の住民がみな、これを聞いて

て、私たちが攻め囲み、私たちの名を地から断ってしまうでしょう。あなたは、あなたの  
大いなる御名のために何をなさろうとするのですか。」

イエスはマタイ6：33でおっしゃいました。「だから、神の国とその義とをまず第一に求め  
なさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

十戒は前半と後半に分けることができます。前半は、神との関係に関わる内容で、後半は  
人間関係に関わる内容です。

パウロは、コリント第一10：31で「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むに  
も、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」と語りました。

パウロは、神の栄光が何よりも優先されることを求め、何をするにしても神の栄光を一番  
に考えていました。

私たちがここで問いかけてみましょう。

祈るとき、私たちは神の栄光を第一に考えているでしょうか。

祈りの結果、神が称えられることを何よりも望んでいるでしょうか。それとも、自分たち  
のニーズが優先でしょうか。神のご計画の成就を求めていますか。それとも、自分の願い  
が叶うことが祈りの焦点でしょうか。

人の祈りは、自分本位になりがちです。イエスは、私たちの祈りから発せられるすべてが  
まず神の栄光を求めるものであるようにと望んでおられます。

スコットランドの著名な説教者ロバート・マーレイ・マクチェインは言いました。「神の  
御前にひざまずく姿が、その人の本性であり、それ以上ではない。」

つまり、祈りの生活が私たちの本当の姿をあらわすということです。

イエスはここで、祈るときにまず心に向けるべきなのは、私たちの物質的なニーズではな  
く、「神の栄光」だと教えておられます。

祈り始めるとき、神ご自身と神の栄光に心を集中させるのです。

ヘブル語の神の名をいくつか知っておいて、祈るときにその名について考えるのもよいで  
しょう。聖書には、145を超えるヘブル語の神の名が登場します。それぞれが神のご性質や  
御業を示します。

これらの名に思いを巡らすことで、神をたたえることになります。

OIC のために今制作中の弟子訓練コースには、皆さんが祈るときに活用できるよう、ヘブ  
ル語の神の名のリストが載っています。

今日は、その中からひとつを紹介しましょう。

他の144の名を知りたい方は、弟子訓練コースのテキストが出来上がった際に、そちらをご  
覧ください。

1. エルシャダイ＝全能の神。ヘブル語で、この神の名が使われている個所を見  
てみましょう。創世記17：1、35：10-11、出エジプト6：2-3、民数記24：4、  
ヨブ記32：8

私たちは神をたたえることができます。それは神がエルシャダイ、全能の神  
であられるからです。神は、全宇宙を御手の中におき、すべてを知る、力あ  
る神です。

ダビデの詩篇を読むと、ダビデが神の栄光にまず目を向けていたことがわかります。

詩篇19：1－「天は神の栄光を語り告げ、」

詩篇24：1－「地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは【主】のものである。」

詩篇46：1－「神はわれらの避け所、また力。」

詩篇66：1-2－「全地よ。神に向かって喜び叫べ。御名の栄光をほめ歌い、神への賛美を栄光に輝かせよ。」

これはほんの一例ですが、おわかりいただけたでしょう。

祈り始める時は、神とそこにご性質に目を向けます。この地上で、大阪で、そしてここ OIC で神の御名が崇められることを求めます。

### 3. 「御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。」

ギリシャ語の言い回しで「御国が」というのは、支配や統治を意味します。イエスは、天の御国は近いとおっしゃいましたが、それは、近いうちに神が地上で権威者となられるという意味です。イエスはご自身の十字架の死によってサタンを打ち負かしました。こうして、神が人々の心の中で王となることが可能になったのです。

イエスを救い主であり主として信じた人は、それまでのサタンへの忠誠を捨て、神との交わりを取り戻します。これは、イエス・キリストの御業のおかげです。

「御国が来ますように。」という祈りは、言い換えると次のようなものになります。

「あなたが私の人生を完全に支配してくださいように。あなたの権威にひれ伏します。私はあなたの民です。私の人生をあなたのみこころにゆだねます。」

このように祈る心構えができていくクリスチャンはどれくらいいるのでしょうか。

私は神に仕えて30年になりますが、そんなふうに祈るクリスチャンはそれほど多くありません。

しかしイエスによると、このような祈りこそ、弟子の祈りの青写真なのです。

私が初めて真剣にこのような祈りをささげたとき、神は私たち夫婦に家を手放してスコットランドの聖書学校に行くよう示されました。そして、私たちを宣教師として日本に遣わされました。私たちは神のみこころが私たちの人生になされることを本気で求めていました。ですから神も、奉仕の訓練を受けるために適切な聖書学校に私たちが行けるよう本気で導いてくださいました。

ここでイエスがおっしゃっているのは、祈るとき、自分の人生のあらゆる局面で神のみこころについて積極的に求める姿勢が必要だということです。

聖書を常に読んで、みことばを求めるなら、私たちは神のみこころをその中に見出すでしょう。

みこころが示されたら、真剣に従わなければなりません。

私たちに従う気持ちがあれば、神はいろんな方法でご自身のみこころを私たちに知らせてくださいます。

モーセは神のみこころを知って悩みました。神がモーセを用いて200万人のユダヤ人をエジプトの奴隷生活から解放しようとなさっていたからです。神はモーセに一本の杖を与えら

れました。この杖は、投げると蛇になるもので、神が奇跡を起こすことのできるお方であるという証になりました。また、兄弟アロンを、モーセの代わりに語る者とされました。

神は、モーセの才能に目を付けられたのではありません。神が求められたのは、モーセの従順です。

「御国が来ますように。みこころが行われますように。」と祈るとき、神のご計画と目的のために用いてくださいと、自分の人生を神の御前に差し出しているのです。

マタイ3：2を開いてください。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」とあります。マルコ1：15も見てください。「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」

「悔い改める」とは、自分の好き勝手をして思い通りの道を歩む古い生き方に背を向け、神に向かい、あなたの道を歩ませてください、と申し上げることです。

では、祈りについて学んだことをまとめてみましょう。

1. 神を父と呼ぶ前に、私たちは神の家族に迎え入れられなければなりません。これは、イエス・キリストについての福音のメッセージを信じることによって実現します。
2. 天の父である神は、私たちの人生の主権者であります。神は私たちの必要を満たしてくださいますが、私たちに躰けもなさいます。
3. 祈る時は、まず神の栄光を最優先に考える必要があります。
4. 個人的なニーズについて心配する前に、神がどのようなお方であるかを認識し、神の御名を称える必要があります。神の誉れを大切にすべきです。
5. 神に人生を明け渡し、神のみこころとご計画が地上で成就することを求める覚悟が必要です。